

目次

序 古谷 稔 3

序 章 13

書跡の評価に関する諸問題

14

「美術」と「書」の近代

16

美術史における書

19

書跡の位置付け

24

第一章 御歌所と仮名 37

一、歌と書 38

二、皇国の歌 40

歌会始と「日本」

40

御歌所の設置

42

御歌所と近代短歌

44

短歌の革新と御歌所

47

三、御歌所と書

仮名を書くことの意味——近代の「みやび」

50

御歌所の歌人と古筆——平安イメージの構築

52

自詠歌の揮毫

55

仮名の手本

56

御歌所歌人の広がり

59

四、交錯する和歌と書

61

第二章

日本書道史の構築——大口周魚から尾上柴舟へ

67

一、大口周魚の手鑑制作と書道史観

68

手鑑「月臺」と周魚

68

大口周魚と書

69

「月臺」の現状と制作背景

73

「月臺」の特徴——選択と排列を中心に

83

法書会「書苑」創刊の意味

85

第三章 国家の名筆

一、書跡の展観と列品

文化財関連行政と書

160

明治時代初期の古美術展観における書跡

161

東京国立博物館における列品としての書跡

169

京都国立博物館における書の展観

176

博物館の展観と書跡

184

二、文化財保護関係法令と書跡

186

二、尾上柴舟と書道史

柴舟と書

113

柴舟と書道史

134

柴舟の書作と理論

148

周魚と柴舟の書道史

150

『書苑』の解説と「月臺」

89

近世における手鑑の様相

105

手鑑「月臺」を通して見えるもの

109

113

第三章 国家の名筆

一、書跡の展観と列品

文化財関連行政と書

160

明治時代初期の古美術展観における書跡

161

東京国立博物館における列品としての書跡

169

京都国立博物館における書の展観

176

博物館の展観と書跡

184

二、文化財保護関係法令と書跡

186

二、尾上柴舟と書道史

柴舟と書

113

柴舟と書道史

134

柴舟の書作と理論

148

周魚と柴舟の書道史

150

『書苑』の解説と「月臺」
近世における手鑑の様相
105 89

手鑑「月臺」を通して見えるもの

109

113

文化財としての書跡

186

「古器旧物保存方」

186

臨時全国宝物取調局による調査から「古社寺保存法」へ

189

「国宝保存法」と宸翰の時代

196

「文化財保護法」の制定へ

204

法のもとの書跡

208

第四章 近代における書跡鑑賞の場

213

一、近代の数寄者と書

214

近代における茶の湯と書

214

茶席に見られる書跡

217

古筆の影印と田中親美

231

近代的な数寄者の時代

238

二、近代文人とそのいとなみ

240

近代における文人の存在

240

近代文人と中国趣味

243

書籍メディアと詩文書画

259

終章

..... 269

卷末資料

..... 275

索引

..... 298

あとがき

..... 299

序
章

書跡の評価に関する諸問題

書道史あるいは書法史を成立させているのは、いうまでもなく各時代にわたる書作品や、それを制作する書家、能書の思想や技術などである。これらに対する史的な考察と、遺墨の詳細な調査に立脚する紹介などを中心として書道史が形成される。しかし、多くの文字資料、なかでも近世以前に書かれた毛筆の書き文字は、制作の当初から書としての価値を有し、その自明の意味において伝来してきたものではない。毛筆の文字のほとんどは、書簡や文学作品のテキスト、あるいは経典や公私の文書として揮毫されたものである。文字の機能の第一義である伝達や毛筆による揮毫の動機を支えているわけであり、言語を演出するための音声と文字という二つの要素のうち、後者の部分がそっくりそのまま「書」とはなり得ないのである。

積み重なった視線によって、日本の歴史に蓄積された膨大な筆跡が取捨選択され、「書」としての価値を高めていく。

もちろん、名筆を鑑賞する習慣は古くから日本に定着していた。

正倉院に所蔵される「東大寺献物帳」には王羲之、王献之の書をはじめ、各種の書跡が記載される。同時に、「喪乱帖」や「孔侍中帖」のように、双鈎本というものの羲之の名筆が早くから日本に伝来してきたこともよく知られ、書跡を愛好する習慣が聖武天皇の時代にはすでに定着している。同時に、光明皇后の「楽毅論」は羲之の臨書とみられ、聖武天皇の「雑集」も多分に羲之や褚遂良あたりの影響を受けている。わが国においても

中国書法、とりわけ唐の文化に育まれた王羲之書法が規範的な意味合いを孕んでいることがわかる。

また、「元永本古今集」や「本願寺本三十六人家集」などのような、書や料紙を含めたその出来ばえに心を砕いた調度手本は、単に文学作品のテキストとしてではなく、書物としての総合的な美しさを競い合っている。明石の姫君の裳着の儀式にまつわるものもろを描く『源氏物語』の「梅枝」では、源氏やその周囲の人々が、あらん限りの工夫を凝らして草子制作にあたる。現在に伝えられる遺墨とあわせ見ると、その心映えが手に取るようにわかるのである。これらは、日本人が文字の揮毫やその鑑賞に関して、並々ならぬ情熱を傾けてきたことを物語っている。

私たちは、どのようにして毛筆の書き文字に「書」としての価値を見出し、名筆として位置付けてきたのだろうか。

日本において、現代、そして現在の書の直接的な母胎である近代に注目して書を語ろうとするとき、大別して二つの視点が存在する。一つは明治時代から昭和戦前期にかけて制作された書を対象に体系を構築することを目的とする近代書道史、もう一つは時代を超えて伝えられてきた多くの遺墨の鑑賞史・評価史と、その史的な体系である書道史に関するものである。近代は、それまでに揮毫されたあまたの毛筆の書き文字を改めて「書」として価値付けた、大きな画期となる一つの時代でもある。

ある人物が筆を執り、文字を記し、さらにそれが名筆として認識されていくための条件をいくつか挙げることもできるだろう。何といたっても書きぶりが優れていること、テキストとしての内容に魅力があること、揮毫した人物が社会的・歴史的な評価を得ていること、遺墨の性格に合致した伝来経路が確認できることなどがまず思いつく。近代を迎えて、これらの条件に見合う遺墨が改めて見出され、整理されて書道史が形作られてき

たのである。

このように、毛筆で書かれた文字が、書としての価値に裏打ちされるまでには、制作にまつわる諸事情と同じく、制作されてからのちの評価観が深く関係している。

筆者名を伴わない古筆切や、特定の人物に宛てられた消息が、「書」として高く評価される場合などはその好例である。もちろん、これらの書を揮毫した人物は、さまざまに思いを巡らせながら筆を執つたに違いないし、限られた相手の視線であつても、強くそれを意識したことだろう。しかし、これらのほとんどは、のちの時代に遺墨を目にするようになる不特定多数の人々の視線を意識して執筆されたものではない。当然、名筆となることが、制作の時点で約束されているわけでもない。これらの揮毫にあつた人物の多くは古くから能書として高く評価された人物であるが、時代を経て彼らが能書たり得る要因の一つには、時代を超えてその遺墨や執筆した人物に対して高い評価が与えられたことにあるのである。その遺墨の当初の制作目的などと同様に、そういう後世の評価観についても体系的に解析していく必要があるのではないかと思う。

「美術」と「書」の近代

平成元年の北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』（美術出版社）にはじまる、美術史そのものに対する再検討によつて、「美術」という概念が、近代国家の構築と深く関係しながらかたち作られたものであることが明らかにされた。その後も、近代の産物である美術のすがたについて、佐藤道信『日本美術の誕生』（講

談社 平成八年)、同『明治国家と近代美術——美の政治学——』(吉川弘文館 平成十一年)、東京国立文化財研究所編『語る現在、語られる過去 日本美術史学100年』(平凡社 平成十一年)、米倉迪夫研究代表『日本における美術史学の成立と展開』(東京国立文化財研究所 平成十三年)、『講座日本美術史』(全六巻 東京大学出版会 平成十七年)などの成果が示され、「美術」として扱われている絵画や彫刻、建築などの性格が浮き彫りにされてきた。

これらのうち、『明治国家と近代美術——美の政治学——』では、近代において「書画」が「書」と「絵画」とに呼び分けられるようになった過程を追い、「美術」の範疇に書がすんなりと取り込まれることのなかつた要因を説明している。また、『日本における美術史学の成立と展開』では、「書と美術史学」という項目が立てられ、書の芸術性について議論されている。しかしながら、美術史の構造に関する再検証という全体の流れのなかで、書を取り扱う姿勢は相対的に消極的である。むしろ、書を包含しないことこそ近代国家の制度として育まれた「美術」の特徴であるようにも見え、その結果に由来して近代美術としての書の位置もあいまいにならざるを得なかつた事情を象徴しているのである。

書においては、これまで、その評価観を体系的に論じた研究は行われてきていない。それだけに、近代における美術史構築とそれに対する批判が行われてきたことと同様に、書においても、書道史構築の過程とその特徴を明らかにしていかねばなるまい。書道史は点として存在する多種多様の遺墨を一つの視点でつなぐ線であり、そこに示される志向は、ある時点における評価観が顕在化したものであるといえる。なかでも、数多くの遺墨を取捨選択し、時代や制作された国などを分類の基準として採用し、それぞれの遺墨の解説や、概説などを付した各種の『書道全集』に代表される書籍がその典型的な例として挙げられる。

そこで、まず本書では、毛筆で書かれた肉筆の文字資料が、書として位置付けられていく過程を追い、近代における書道史形成の軌跡をたどることで、そこに採択された日本の書跡を中心とする資料の特徴を確認することにしたい。はじめに、法書会が発行した書の専門誌『書苑』誌上で、主に日本の書跡に関する解説を担当し、「本願寺本三十六人家集」の発見や手鑑「月臺」の編集などで知られた大口周魚の書道史観を整理する。また、周魚の活動の場の中心である御歌所と書の関係についても論ずることにする。続いて、その門下である尾上柴舟の書作と書道史に関する仕事を通して、この時代に形成された書道史の傾向を明瞭にする。書の評価は書道史関連の出版に端的に示されるところであり、なかでも、戦前版の平凡社『書道全集』はその嚆矢として、特筆すべき特徴を備えている。周魚の影響を強く受けた柴舟は、日本の書跡を中心にその編集に深くかかわっている。この全集の資料選択の傾向について詳しく探り、近代的な「書」の世界でどのような書跡がいわゆる名筆として位置付けられ、重要視されることになったのかを明確にするものである。

さらに、近代日本において急速に整備された法と行政機関のもとで、文化財として書跡がどのように扱われてきたのかを、主に明治期の博物館における展観や列品、関連する法令から知ることにはしたい。明治初年以來、書跡は数々の展観に出品され、文化財関連の法令によって保護・保存の措置がとられてきた。この範疇においてどのような資料が書として位置付けられ、どのような分類が行われてきたのかを、各種の目録などから整理する。同時に、行政内部で書跡がどのような位置で扱われたのか、東京国立博物館へとつながる博物館における列品としての書跡の変遷をたどることにしたい。保護・保存を主眼とする文化財行政において対象とされた資料も、この時代の書跡の評価観を示す一つの規準となるものといえる。

加えて、近代的な知識層が私的に書跡を鑑賞する場について、その断面を垣間見ることにしたい。ここでは

特に、徳川時代末期の儒学を身につけた文人たちが盛んに開催する煎茶会や漢詩会、財閥の台頭した経済界を背景とする茶席などで鑑賞される書跡の特徴を確認するとともに、文化環境としてそれらの場がどのような役割を担っていたのか、先の公の世界と併せ見ることで、近代における知識層の書をめぐる教養の実像を浮き彫りにしたい。さらに、元来、個人的な楽しみである雅会が、その担い手の重なり合いによって出版や法整備などに場を移して新たな潮流を生み出した過程にも言及する。

美術史における書

ここでは、日本の書跡を中心に、美術史との関連を視野に入れながら、日本における書跡評価の集積ともいえる書道史形成までの過程を追うことにしよう。

さまざまな要因によって伝えられてきた数々の名筆は、次の時代の名筆を生み出す糧となっている。ある人によって制作された書は、その制作の背景や意図を踏まえながら批判の対象となり、さまざまな角度から鑑賞され、学習の対象ともなっていく。

しかし、毛筆で書かれた文字を批判の対象とする近世以前の著作は、鑑定家による遺墨の分類であったり、能書たちの秘伝の類であったりする場合が多い。『夜鶴庭訓抄』や『入木抄』などがその一例に挙げられる。古筆手鑑やそれに関連した書物などに、おおむね時間軸に沿った遺墨や能書の排列が見られるものの、体系的に、史的に書を捉えようという意識は希薄である。やはり、体系的に書の流れをたどるという意識が芽生え、形を

「雜彫刻」「漆工」「窯工」「錦綾、刻絲」

藤原平家時代

「屏風、巻物等の絵画」「仏教画」「書」「彫刻」「漆工」「錦綾」「金工」「建築」

ここには、その時代に制作された書や篆刻という作品そのものだけでなく、「淳化閣帖」や「大観帖」などの集帖制作の背景や、文房趣味、装丁の変遷など、書にまつわる解説が多面的に行われている。「真に文化の有様を知悉する」ための手立てとして、書を取り巻く種々の状況をも加味したこの「美術史」は、西崖が書に対して造詣が深かったことを示しているのはもちろんのこと、東京美術学校における美術史の講義で、日本を含む「東洋美術」の特徴を反映させ、その枠組みを、西欧から輸入された「美術」とは別に捉えていたことがわかる。

この西崖の美術史は、書の扱いから見ること、その特徴を浮き彫りにすることができる。しかし、大正十五年に発表されたこの論は美術史のスタンダードな考え方としては発展しなかった。書を中心とする歴史の体系化は、これらとはまた別の場において行われているのである。

本書では、日本の書跡を対象の中心に扱うが、これらは大陸からの絶え間ない書法の受容と同時に、書といういとなみそのものを日本人独自の感性が醸成してきた結果として伝来してきたものである。毛筆による手書き文字の遺品が取捨選択され、価値観の整理と明文化が行われた時代がまさに近代であり、この時代を経たことよって現代を生きる私たちに、いわゆる「名筆」が一定の価値観のもと伝えられてきているのである。これまで見てきたとおり、書跡の評価の内容が具体的に示される場面には、出版をはじめ、宝物調査や展覧会の開催などがある。また、文化財関連の法令、さらには茶の湯の席や煎茶会などにおける私的な鑑賞の機会などもこれに加えなければなるまい。個々の遺墨に対する評価もさることながら、これらの場でまとまって紹介さ

れた書跡の性格を俯瞰することで、この時代に急速に明確にされるところとなった書跡に対するまなざしの在りかを探ることができるのである。

序章註

〔註1〕『真美大観』編集の背景については、村角紀子「審美書院の美術全集にみる『日本美術史』の形成」(『近代画説』第八号

明治美術学会 平成十一年)に詳しい。本稿においてもこれに拠った。

〔註2〕佐藤道信『明治国家と近代美術——美の政治学——』(吉川弘文館 平成十一年) 一二六頁。

〔註3〕田島志一『東洋美術大観』第一冊(審美書院 明治四十一年)序文。

〔註4〕〔註1〕参照。

〔註5〕『大師会展観図録』には、明治二十九年の第一回から第一五回までの大師会における展観目録が記録されているが、図版には明治四十四年の第一五回の展観に供されたものだけが採録されている。この会では、弘法大師空海にまつわる書画や道具類を幅広く用いた。茶席には、毎回、工夫が凝らされ、「寸松庵色紙」や「継色紙」など断簡となった写本を可能な限り一堂に集め、復原的に排列しなおす作業などが試みられている。

〔註6〕これに先んじて刊行された「朝陽閣帖」について、刊行の経緯や資料選択については、西嶋慎一「大蔵省印刷局・朝陽閣帖の謎」(『大東書道研究』第一四号 大東文化大学書道研究所 平成十九年)に詳しい。この論考で「朝陽閣集古」についても言及しており、これを参考にした。

〔註7〕茶の湯と書については本書第四章の「近代における茶の湯と書」を参照。

〔註8〕『東洋美術史』は大正十五年に東陽堂書店から発行された。この本は、明治三十八年、東京美術学校の講義用に出版された「東洋美術小史」が核を成している。さらに明治四十三年、『支那絵画小史』『日本絵画小史』に加筆修正が施され、この『東洋美術史』となった。

も書写年代がさかのぼる古筆であり、「広沢切」は伏見天皇の筆であることが明確で、このなかでは最も時代的に下る古筆である。同様のことは裏の経切にも当てはまり、冒頭、聖武天皇「大和切（大聖武）」から最後の「笠置切」まで、ほぼ、書写年代に従っている。例外的なものとして、古筆切のなかで、現在は十一世紀後半から十二世紀はじめにかけての書写と考えられている「中院切」と「如意宝集切」が、才34〜37に配置されているが、周魚は、「中院切」に関しては次のような見解を示している〔註13〕。

紅紫色の飛雲ある上に、金銀の砂子蒔きたる料紙、まづいひしらずなつかしくて、平安朝のものと思ゆるを、何人か之を鎌倉右大臣の筆とは定めけん、ことにその書風は、佐理公任二卿のおもかげをそなへたる老熟の筆なれば、年末だ三十にみたくして薨せられし公の手跡とは信がたきをや。かの公任卿の男なる定頼卿の烏丸切と相似たるところあれば、その卿の筆と定めし人もあるは、宜なりかし。

さはいへど右府は、新古今の時代にありながら、その歌は万葉の古調を慕はれし人にておはせしかば、その書も亦時流を超越して、上代の風格を具へ、夙く老熟の境に達せられたらん事、おして知るべし、故に此の中院切は、ことさらに上代の紙を用ゐて、右府の書かれしものならんもはかるべからず、たしかなる証拠を見出す迄は、しばらく古筆家の鑑定に従ふべくなん。

この「中院切」が「烏丸切」と類似していることを指摘し、伝称筆者が書写年代とかけ離れている可能性を示唆しながら、確固たる根拠を見出すまでは従来の鑑定に従うという、周魚の慎重な態度が見られる。「如意宝集切」に関しても、今泉雄作が、『書苑』第一巻第三号において、これと同筆と見られる伝宗尊親王筆「寛平御歌合切」を鎌倉時代の筆跡であると推測している。これらを踏襲して「月臺」の編集に反映させ、この二種の古筆の配置が決定されたものと考えられる。伝藤原公任として六葉五種、伝源俊頼として五葉五種の古筆が見られるよ

うに、現在の研究状況に照らして、執筆年代をもとに厳密に整理しているとは言い難いが、全体的な傾向としては、時間的な流れに沿っているといつて差し支えあるまい。

また、オ27「仮名観普賢経切」やウ5・6「正倉院文書断簡」などのように伝称筆者を伴わない断簡でも、推定される書写年代にしたがつて排列を行っているものもある。さらに、奈良時代に書写された「紺紙銀字華嚴経」は、寛文七年（一六六七）の修二会に起因する火災で焼損し、延宝六年（一六七六）に修理され紺紙で裏打ちされた。このウ18「二月堂焼経断簡」は、安政五年（一八五八）版の『増補新撰古筆名葉集』に該当するものが見当たらず、幕末までに編集された手鑑などに押されたものもない。維新後に巷間に出てその存在が知られるようになり、「月臺」編集時には断簡にされて間もないものだったが、紫紙金字の「紫切」（ウ17）と同じ菅原道真を伝称筆者にあててこの手鑑に収めた。その一方で、消息や墨蹟、唐様、連歌の類は一葉も押されていない。

これらの特徴は、近世に盛んに制作された手鑑や『手鑑行列』『古筆総捲』といった手鑑制作の指針となる書籍には見られない傾向を示している。周魚の書道史に対する姿勢の特徴的な一面を具現化したものがこの「月臺」であると言えるだろう。

法書会『書苑』創刊の意味

美術史形成の過程において、『真美大観』や『東洋美術大観』、『稿本日本帝国美術略史』のように全集や単行

容と変容の過程を分析している。

それまでの平安古筆主義から、地域的にも時代的にも幅を広げ、さらにはその影響関係を考察した本書は、柴舟の書道通史として唯一のものであり、独自の視点で書道史を構成した特異な著作でもある。古筆の研究を得意とした柴舟だが、中国小説の翻訳を頻繁に手がけているように、国文学界きつての中国通でもあり漢学にも通じていた「註60」。戦後の自由な空気は、柴舟に自らの見識を最晩年の一冊で惜しみなく発揮させたのだろう。

柴舟の書作と理論

柴舟歿後の書壇において、仮名の書を支えることになる日比野五鳳（二九〇—一八五）は、昭和二十三年の第四回日展から公募出品をはじめた。柴舟は審査員の一人として彼を高く評価し、第七回展で早くも特選を与えている。柴舟は自らの書風との関係は問わず、基礎的な教養と技術を身に付けた書家を大いに評価している。柴舟自身がそうであるように、書道史や文学といった論理的な方法を獲得し、合理的に解釈することのできる書の評価したわけである。

歌作と平安文学の研究から派生した柴舟の書の研究と制作は、車の両輪となつていずれも欠くべからざるものとなつた。文化的な背景を重視し、常に原資料を重んじた柴舟の書道史観が最も端的に表されたのは、実は彼の作品そのものであるということが出来る。自ら詠んだ歌を、自らの研究を背景にして制作する姿勢が、平安古筆に依拠する、一見流麗で典雅とも評すべき作品を生み出した。しかし、柴舟の書は、これらの評語だ

けでは語りきることでできない構築性の高さを宿している。決して感覚に振り回されず、徹底して理知的な制作に没頭したところから、晩年の自然で重厚、含蓄に富んだ書が生まれたのである。

柴舟の書は、形態の模倣からは生まれにくい性質の書である。単に書壇における柴舟の働きを振り返るだけでは、彼の魅力はなかなか見えては来ない。柴舟の語るごとく、彼の置かれた時代的な環境を理解し、その多方面にわたる仕事を理解していくことで、はじめてその書の意味が受け取れるように思われる。

『平安朝時代の草仮名の研究』や『歌と草仮名』、『日本名筆全集』、河出書房版も含め三種の『書道全集』など、彼の執筆した書籍には、版を重ね、広く親しまれたものが多い。戦前の著作では、時代的な思潮も手伝って、平安主義の体系化に力が注がれ、大口周魚の書道史観を発展させながら日本書道史の重要な部分を明文化した役割は大きい。彼が平安古筆を学問的に数多く紹介したことで、明治以来の平安古筆主義が現在の書壇にも引き継がれ、書の古典として普遍的な意味を与えられたのである。これは、戦後の古筆研究進展のきっかけにもなっている。

晩年の柴舟は、自らの来し方を振り返り、その道程をいくつかの歌に詠んでいる。

我みちは人のみちとしことならね 我たどるごと人はたどらず

遺作「道」に詠まれたこの歌を見た西川寧は、「これは現在の書壇への先生のいきどほりである。それを先生はやまいをおしてかいたのだ」と解釈し「註61」、書壇の変化にも動ずることなく、古典主義の姿勢を崩さない柴舟の存在感を改めて確認し、叙情的なきれいなことに終始しやすすい仮名の造形の骨をつかんだ尾上芸術を再評価している。

いくそばく闇をてらすとなけれども 我も一つの火をともしつつ

最後となったこの歌には、柴舟の、歌と書の世界における開拓者としての自負が窺える。この柴舟の思いは、現在も両方の世界で生き続けているとわかっていい。研究によって冷静に古典を見つめなおし、歌と書の両面における創作によってそれを再生産した柴舟の透徹した姿勢に再び思いをめぐらせてみることも時には必要なのかもしれない。

周魚と柴舟の書道史

第二章では、法書会の『書苑』で日本の書跡の紹介と解説の執筆を活発に行うと同時に、「月臺」に代表される手鑑の制作などを手掛けた大口周魚から、その門下で歌人や国文学者として知られ、書家として、また書道史研究者として足跡を残した尾上柴舟へと受け継がれた書道史観を整理したことによって、平安古筆を軸に展開したこの時代の日本書道史の特質を明らかにした。彼らの考えは、『書苑』や戦前版の平凡社『書道全集』に端的に示されるところであり、この時代の日本の書跡の評価が、歌人である彼らの志向に強い影響を受けたものであることがわかる。彼らの考えが書跡の写真とともに明文化されたことで、それまで体系化されることになかった書道史の外形が浮き彫りにされ、これ以降、これらの業績を基軸に書道史研究が進展すると同時に、これに対する批判が繰り返されることでその深化も図られることになったのである。

また、出版によって示された書跡は、古典としての意味合いを持ち、鑑賞という面においてはもとより、実際に筆を執って書を学ぶ場面においても規範的な役割を果たすものとして、同時代の書家の制作にも少なから

ず影響を与えたことが容易に理解されるのである。

第二章註

〔註1〕周魚の経歴については、高橋利郎「大口周魚と『書苑』」(『成田山書道美術館報第二〇号』平成十四年)にまとめた。

〔註2〕大口周魚「行成卿古今集零本」解説(『書苑』第七卷第七号 法書会 大正六年五月)に端山がこの零本の購入を検討しながらも入手できず、関戸家の有に帰するまでの経緯が回顧されている。

〔註3〕この跋文では自ら姓に「坂」字を用いているが、その息である阪匡身が編集した正臣の全集『椋屋全集』では「阪」字を使用しないで、一般にもこれで通用していることから、本稿においても「阪」とした。正臣は名古屋の出身で、父の歿後、阪廣雄のもとで国学を学んで祠官となった。上京後は国文や和歌を専門として、明治三十年、四三歳で御歌所寄人となった。明治二十年十二月から二十二年四月まで高崎邸内に住んだ。御歌所には中京地区の出身者が多く、大口の入所にも何らかの影響を及ぼしたことが想像される。

〔註4〕法書会『書苑』第二卷第一号の大口周魚による解説に「本書もと大師入唐当時の文書数巻と共に圍城寺に伝はりたりしが、維新前故ありて皆輪王寺宮の有に移り、今現に北白川宮の御蔵たり。本書の世にある事、古来絶えて之を知る者無かりしにや、種々の集帖中にも、一も之を載せたる者なし、明治二十三年本朝古筆研究の為に起りたる難波津会に於いて、之を拝借しける折、高崎正風翁の翰旋をもて、余が影写の許を蒙りたるより、始めて世に出でたり。」とある。

〔註5〕「本願寺本三十六人家集」は、周魚が発見した当時、当初の原本三四帖と後世の補写本五帖の計三九帖で構成されていた。昭和四年、これらのうち、「貫之集下」と「伊勢集」の二帖が断簡となり、「石山切」として諸家に分蔵されるところとなった。その発見の顛末と周魚のこれに対する見解の概略は『後奈良天皇恩賜三十六人家集写真帖目次序跋』(本願寺内室部 明治四十二年二月)に詳しい。この小冊子は、別冊写真帖の釈文、阪正臣の序文、周魚の跋文で構成されている。これは『書苑』第二卷第六号に「本願寺本三十六人家集につきて(乙)」として再録された。周魚はさらに考察を進め、「本願寺本三十六人家集考証」を執筆する心積もりをしていたが、実現しなかったようである。

索引

※本文中の主な事柄を、資料・作品
および人名に分類して項目とした。

資料・作品索引

〈あ〉

藍紙本万葉集 54, 234

赤人集 181

秋菽帖 137, 181

安宅切本和漢朗詠集 53

敦忠集切 80

〈い〉

和泉式部統集切 75, 80, 104, 105, 131

伊勢集 181

伊勢物語切 83

伊都内親王願文 52, 100, 209, 210

〈え・お〉

絵因果経 234

大聖武 84, 104, 168, 202

太田切和漢朗詠集 137

大手鑑 107, 183, 215

尾形切 81

小倉色紙 60, 167, 168, 171, 217

恩命帖 52

〈か〉

神楽譜 181

笠置切 83, 84

春日懷紙 100, 101

楽教論 14, 25, 26

桂本万葉集 32, 52, 53, 54, 57, 64, 120,
123, 124, 125, 131, 137, 234

仮名觀普賢經切 85, 105

金沢本万葉集 53

烏丸切 84

卷子本和漢朗詠集 53

寛平御歌合切 84

翰墨城(手鑑) 106, 236

〈き・く〉

紀泰山銘 167

行成卿朗詠切 215

玉泉帖 52

久能寺経 234

熊野懷紙 100, 137, 180, 181, 198, 230

雲紙本和漢朗詠集 53, 183

〈け〉

月臺 7, 8, 18, 60, 68, 69, 70, 71, 73,
74, 75, 80, 81, 82, 83, 84, 85, 89,
102, 103, 105, 109, 110, 111, 112,
135, 150, 183

元永本古今集 15, 130, 131, 181, 234

賢愚経 100, 104, 168, 202, 210

源氏物語絵巻 39, 137, 234

元暦校本万葉集 54, 72

〈こ〉

香紙切 29, 81, 105

孔侍中帖 14

皇太宮亮藤原信綱真蹟懷紙 100

後宇多天皇宸翰弘法大師傳 101

弘法大師巻物切 100

高野切 27, 57, 81, 103, 114, 120, 123,
124, 125, 126, 127, 129, 130,

131, 137, 167, 168, 181, 184, 208
五月一日経 83, 168
哭澄上人詩 166, 168, 184
小島切 28, 81, 92, 131
紙撚切 81, 102, 103
紺紙銀字華嚴経 85, 187

〈さ〉

崔子玉座右銘 168, 229, 230
嵯峨天皇宸翰唐詩集 100
嵯峨天皇宸翰卷物 162, 184
佐竹本三十六歌仙絵巻 234
雑集 14
佐理卿真蹟詩懷紙 90, 100

〈し〉

重之集 181
慈鎮和尚消息 100
始平公造像記 100
十五番歌合 137
淳化閣帖 35, 108
正倉院文書断簡 85
浄弁真蹟三首懷紙 101
聖武天皇宸翰賢愚経 100, 104
神護景雲経 100
神護寺経 187
真言七祖像賛 171

〈す・せ・そ〉

開寺心経 167, 168
寸松庵色紙 130, 131, 137, 167, 168,
184, 208, 230, 231, 232, 233,
234, 236
関戸本古今集 70, 120, 129
扇面法華経冊子 21

造東大寺司古文書 100
喪乱帖 14

〈た〉

大覚寺結夏衆僧名单 101, 183
大観帖 35
高松帖(手鑑) 236
谷水帖(手鑑) 109

〈ち〉

筑後切 101
智証大師諡号勅書 72
驩国創業絵巻 127, 130, 155
蝶鳥下絵経切 83
朝陽閣集古 25, 26
朝陽閣帖 25

〈つ・て・と〉

継色紙 131, 230, 233, 234
貫之集 53, 181
粘葉本和漢朗詠集 32, 53, 115, 125,
126, 127, 128, 129, 181, 184
天治本万葉集 54
東大寺切 105
東大寺献物帳 14

〈な・に・の・は〉

中院切 84
二月堂焼経 85, 187
二条殿切 104, 105
如意宝集切 84
野辺のみどり(手鑑) 109

〈ひ・ふ・へ〉

ひぐらし帖 236

屏風土代 52, 90, 92, 100
広沢切 84
風信帖 26
平家納経 21, 22, 137, 181, 234, 235,
237, 239

〈ほ〉

宝亀三年自政所紙納帳 100
法輪寺切 81, 83, 96, 105
法華義疏 168
法性寺忠通公消息 100
本阿弥切古今和歌集 53
本願寺本三十六人家集 15, 18, 32, 54,
72, 73, 130, 131, 134, 180, 181,
183, 184, 185, 234, 238

〈ま・み〉

枕草子絵巻 126, 127
まつかぜ 81, 82, 83
道風朝臣真蹟屏風土代 100
躬恒集 181, 286
見ぬ世の友(手鑑) 106
民部切 105

〈む・も〉

紫切 85
藻塩草 106, 236

〈や・ゆ〉

大和切 77, 78, 84
行成卿真蹟書巻 97, 100

〈ら・る・れ〉

落葉集 32, 177, 180, 182, 183, 185, 209
落葉帖(手鑑) 236

類聚古集 72
例規録 43

人名索引

〈あ〉

アーネスト・フェノロサ 20
相澤春洋 239
浅井柳塘 253
朝吹柴庵 214, 215
足利義輝 165, 179
飛鳥井宋世 167
油谷達 86

〈い〉

飯島春敬 111, 208, 239
井伊直弼 242
池辺義象 43, 74
石川鴻斎 256, 257, 258, 260
石川啄木 48
石田茂作 208
磯野於菟介 86
板倉槐堂 244
一山一寧 178
出雲路敬通 32, 180
伊東忠太 22, 87, 88, 139
伊東祐命 71
井上毅 238
井上通泰 43, 60
稲生真履 195
伊孚九 253
今泉雄作 21, 22, 24, 84, 87, 140
今村長賀 195
入江為守 43, 44, 46, 57, 60

岩田鶴臯 139, 142, 145
岩田正巳 127
岩橋小弥太 203
巖谷一六 61, 62, 119, 122, 259, 260,
274
巖谷小波 115
岩谷莫哀 116
隠元 179, 244, 253

〈う・え〉

植村和堂 239
梅沢鶴叟 214, 215
瓜生百里 214, 215
江刺恒久 114
江馬天江 241, 242, 244, 253
円珍 26, 178

〈お〉

王羲之 14, 15, 108, 141, 143, 147, 167,
257, 258, 261
王猷之 14, 108
大口周魚 4, 7, 18, 32, 54, 56, 59, 60,
61, 62, 64, 67, 68, 69, 70, 82,
114, 115, 116, 121, 124, 134, 146,
149, 150, 180, 183, 214, 234,
236, 238, 271, 274
大久保利通 (甲東) 172, 241
太田謹 195
王鐸 253
大田蜀山人 214
大概文彦 87
大沼枕山 241, 242, 260
大村西崖 21, 24, 33, 140, 240, 242, 265
岡倉天心 (覚三) 22, 86, 160, 195, 265
岡田為恭 234

岡田茂吉 106
岡本半助 190
岡谷簀山 236
岡山高蔭 58, 60, 86, 214, 215, 238
荻生徂徠 255, 256
奥原晴湖 169, 240, 242, 256, 257
奥蘭田 262, 263
落合直文 114, 115, 121
尾上柴舟 4, 7, 8, 18, 48, 58, 63, 67, 72,
75, 82, 110, 112, 113, 123, 126,
129, 139, 140, 145, 150, 181,
182, 183, 238, 271
小野鶯堂 57, 71, 117, 124, 135, 154
小野湖山 241, 260
小野道風 52, 53, 72, 81, 178, 183

〈か〉

香川景樹 50, 57, 71
角田竹冷 115
笠原祥雨 107
花山院長親 178
梶田半古 115
糟屋半醒子 236
片野四郎 24, 195
勝海舟 242
加藤旭嶺 116
加藤千蔭 123
加藤義清 43, 51, 52
金沢美巖 116
金子薫園 114, 115
亀田省軒 260
亀田鵬齋 179, 214
烏丸光廣 102, 108
川合玉堂 115, 118, 131
河井荃廬 139, 140, 142
川上冬崖 169

川崎千虎 195
川田甕江 241
川端玉章 195
神田喜一郎 146, 240

〈き〉

北小路三郎 43
北澤憲昭 16
北島雪山 179
木戸松菊 241, 242
紀淑雄 195
許友 253
久曾神昇 111

〈く〉

空海 26, 145, 167, 168, 171, 178,
183, 230
九鬼隆一 20, 22, 24, 34, 87
愚極 167
九條尚実 167
工藤文哉 110, 145
熊谷直孝 (酔香) 243, 257
熊谷直行 243, 244
熊倉功夫 217
熊澤一衛 60, 74, 75, 236, 238
栗山善四郎 219, 234
黒板勝美 87, 139, 142, 211
黒川真道 195
黒川真頼 22, 43, 61, 195
黒木安雄 86

〈け・こ〉

倪元璐 253
玄宗皇帝 167
小出粲 43, 57, 60, 62, 113, 121

江稼圃 253
郷純造 258
黄道周 167
虎関師鍊 167
児島猷吉郎 195
小杉温邨 22, 26, 61, 71, 211
胡兆新 167
後藤朝太郎 86, 88
小中村義象 114
近衛家熙 99
近衛信尹 102, 133
近衛龍山 167
小林卓斎 262
古筆了佐 108
小堀遠州 217, 244
小松茂美 3, 4, 111
後水尾天皇 162, 166
小山正太郎 160
後陽成天皇 166
是澤恭三 208
近藤芳樹 42, 50

〈さ〉

西行 57, 81, 90, 104, 105, 113, 167, 215
最澄 178, 183
斎藤謙 195
酒井抱一 214
嵯峨天皇 100, 166, 168, 178, 184
佐藤道信 5, 16, 36
佐佐木信綱 43, 53, 58, 60, 64, 75, 87,
113, 114, 139, 142, 214, 215, 234,
236
三条公輝 43
三条西季知 42, 44
三條実美 172, 234
三條西実隆 167

〈し〉

慈円 183
重野成斎（安繹） 195, 241
直頼高 113, 114, 115, 121, 123
七條愷 86
慈鎮 31, 100, 224
柴野栗山 167
寂蓮 167, 178, 215, 224
周煌 179
酒道人 167
聖宝 178
白鳥省吾 116
心越 224, 253

〈す・せ・そ〉

須川信行 43
菅原道真 85, 167
鈴木重嶺 113, 121
鈴木松年 260
関戸守彦 236
関保之助 195
宗祇 178
副島種臣（蒼海） 241, 260
尊田親王 101, 183

〈た〉

高崎正風 42, 43, 44, 45, 47, 48, 50, 56,
57, 59, 60, 61, 62, 64, 71, 72, 73,
123, 151, 274
高取稚成 126, 127
高橋健三 86, 141
高橋箒庵 60, 64, 70, 80, 214, 231, 232,
235, 238, 239, 274
高松即是 236
高山昇 235

瀧和亭 260
瀧精一 86, 203
武島又次郎 43
武田信玄 179
多田親愛 71, 234
竹中公鑒 195
田中親美 5, 9, 27, 31, 33, 53, 54, 64,
69, 72, 73, 74, 86, 109, 120, 122,
147, 180, 214, 215, 231, 234,
236, 238, 239
田中光顕（青山） 24, 28, 32, 53, 71, 74,
238, 274
田中有美 234
谷森真男 195, 234
田能村竹田 256
田能村直入 240, 241, 242, 244, 257,
260, 262
田山信郎 208

〈ち〉

千葉胤明 43, 58
千原夕田 242
張秋谷 253
張瑞図 169, 179, 253
張即之 178
長梅外 241
陳猷章 178

〈つ・て・と〉

辻善之助 203
辻本史邑 118
程赤城 179
鄭板橋 253
寺西易堂 262
董其昌 169, 256
遠山英一 43, 57

徳川圀順 214
得能良介 26

〈な〉

内藤湖南 140, 142, 145, 241
中井敬所 195
永坂石埭 257, 258
中田勇次郎 208
中村岳陵 127, 155
中村敬宇 260
中村不折 139, 140, 259, 261
夏目漱石 87, 254, 257
成島柳北 241

〈に〉

西川春洞 116, 274
西川寧 3, 122, 149, 208
二條為明 167
二條為氏 167

〈ぬ・の〉

貫名菘翁 179
野口小蘗 61, 263
野本白雲 110, 138, 140, 145

〈は〉

萩谷朴 111
橋本雅邦 195
服部有恒 127
服部波山 260
林屋辰三郎 107
原三溪 239
阪正臣 32, 43, 51, 54, 55, 57, 58, 59,
60, 61, 68, 69, 70, 71, 74, 83,
124, 135, 236, 238, 274

〈ひ〉

樋口勇夫 86
比田井小琴 63
比田井天来 139, 142
日比野五鳳 148
平野五岳 240, 242
平山成信 195
広瀬旭莊 241

〈ふ〉

深草元政 224
福井利吉郎 235
福羽美静 42, 50, 61
藤沢南岳 262
伏見天皇 83, 84, 101, 166, 202
藤原行成 38, 53, 75, 81, 83, 167
藤原定家 75, 167, 171, 178, 217
藤原敏行 178
藤原宣房 178
古田織部 244
文徵明 169
豊道春海 116, 122, 131

〈へ・ほ〉

米芾 256
豊道生 178
坊門局 103
細井広沢 179
堀江知彦 208
本阿弥光悦 99, 102, 133, 230

〈ま〉

前田健次郎 195
前田黙鳳 114, 141, 253, 254
正岡子規 47

間嶋冬道 43, 60, 62
町田久成 170
松岡映丘 127
松尾芭蕉 224
松平定信 217
松平不昧 217
松田常憲 118
益田鈍翁 25, 60, 106, 214, 216, 232,
234, 235, 238, 239, 274
松原佐久 234
万里小路宣房 79

〈み・む・め〉

溝口禎二郎 195
三井華精（高保） 29, 214, 217, 231,
234
三井八郎次郎 195, 216, 231, 239, 274
三室戸敬光 43, 46
宮原易安 244
三輪執斎 164, 167
夢窓疎石 167
宗尊親王 28, 84
明治天皇 39, 40, 41, 43, 45, 55, 59, 62,
63, 64, 73, 234

〈も〉

木庵 179
本居豊顛 43
本居宣長 50
森槐南 241
森川竹窓 166
森川如春庵（勘一郎） 33, 216, 233,
236, 238, 274
森琴石 262
森春濤 241, 260

森田竹華 63

〈や〉

安田善次郎（松翁） 217, 225
矢土錦山 260
梁川星巖 241, 257
山内飽霜軒 236
山県篤藏 195
山田永年 262, 279
山高信離 195
山田寒山 257
山中市兵衛 260
山中信天翁 241, 242, 244

〈よ〉

楊守敬 258, 259
横山大観 265
吉田丹左衛門（知光、楓軒） 27, 31,
109, 214, 215, 235
吉嗣拝山 242
吉村忠夫 127
依田学海 260

〈ら・り・れ・わ〉

頼山陽 176, 243, 254, 257
蘭溪道隆 178
李鱣 253
冷泉為相 167
渡邊沙鷗 72, 116, 261

高橋 利郎 (たかはし としろう)

昭和 47 年静岡県生まれ。東京学芸大学卒。

静岡大学大学院修士課程、大東文化大学大学院博士後期課程修了。

博士 (書道学)。

成田山書道美術館学芸員を経て、大東文化大学文学部准教授。

著書に『江戸の書』、成田山書道美術館編『日本の書 維新～昭和初期』(以上、二玄社)、

成田山書道美術館監修『近代文人のいとなみ』(淡交社)など。

きんだい にほん
近代日本における書への眼差し
まなざし

— にほんしよどうしけいせい きせき
日本書道史形成の軌跡

平成二十三年(二〇一一)十二月二十六日発行

発行者 田中大

発行所 株式会社 思文閣出版

千六〇五—〇〇八九

京都市東山区元町三五五

電話〇七五—七五一—一七八一

定価 本体四、八〇〇円(税別)

印刷・製本 株式会社 図書印刷同朋舎

編集 殺風舎 大貫玲子

©Toshiro Takahashi. Printed in Japan 2011

ISBN 978-4-7842-1595-9 C3071